



207
特234
5
128

m | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15

始



繪本
増補
玉藻前廻秩

三好

子夕陽も終て安んじ

きりすの香もいそ

美色もあつた

のそらもあつた



のせむぎ入来る鐘音
金着流来の鐘音
村いっひおよなぬこた
おまろがこあらぬ後
後家後いんおひん

五十一

かよはぬぬいなるか
家ひおつら後の鐘音
られ下つてまむと鐘音の
須み舞よまのひんぬ
後家後いんおひん

獅子の舞を舞臺に舞
さるる舞臺の舞臺に
さるる舞臺の舞臺に
今頃舞臺の舞臺に
舞臺の舞臺の舞臺に

舞臺

舞臺の舞臺の舞臺に
舞臺の舞臺の舞臺に
舞臺の舞臺の舞臺に
舞臺の舞臺の舞臺に
舞臺の舞臺の舞臺に

とせうち候哉
先達の威勢の如き
うごのふか梅つ舞
あづの梅有のんか後
かされのうらみせぬ行
送

出た
12

梅ふりつと後の方達
波ふきあは後梅
こかたはのゆかか
のうらみせぬ行
波ふきあは後梅

よららき道れぬ娘が余未
練のまろあがうらあや
べらまのまふたまき
はまらあはらあはらあ
のほらあはらあはらあ

金丸 夏

三日月の素心結をあらた
産まはらあはらあはらあ
の秋形のあはらあはらあ
秋のあはらあはらあはらあ
ほらあはらあはらあはらあ

因^{あし}着^{あし}身^み持^たぬ^ぬ身^み全^{ぜん}
積^つる^るの^のか^かひ^ひま^まぬ
そ^そ敷^し女^にの^の心^こと^と理^り美^み
の^の心^こと^と理^り美^みの^の心^こと^と理^り美^み
と^と理^り美^みの^の心^こと^と理^り美^み

因^{あし}着^{あし}身^み持^たぬ^ぬ身^み全^{ぜん}

こ^この^の心^こと^と理^り美^み
の^の心^こと^と理^り美^みの^の心^こと^と理^り美^み
の^の心^こと^と理^り美^みの^の心^こと^と理^り美^み
の^の心^こと^と理^り美^みの^の心^こと^と理^り美^み
の^の心^こと^と理^り美^みの^の心^こと^と理^り美^み

あはれなる女は
と身重の重なる女
さあはれなる女
あはれなる女
あはれなる女
あはれなる女

あはれ

あはれなる女は
あはれなる女
あはれなる女
あはれなる女
あはれなる女
あはれなる女

寂滅の夜にたれわ
さぶ女氣の秋にたれわ
かたしと権もほは余
かづる勝るあひこ
て濁さざらんばと
の

かたしと権もほは余

梅の端の夜にたれわ
霧の谷のあひこ
たつたあひこ
秋の夜にたれわ
かたしと権もほは余
かづる勝るあひこ
て濁さざらんばと
の

母の心はなほおぼしき
今も昔も同じく
娘の心はなほおぼしき
母の心はなほおぼしき
母の心はなほおぼしき
母の心はなほおぼしき

第九

の心はなほおぼしき
母の心はなほおぼしき
母の心はなほおぼしき
母の心はなほおぼしき
母の心はなほおぼしき
母の心はなほおぼしき

おと多し姉妹の公様
お母の御心ざりて
お母の御心ざりて
お母の御心ざりて
お母の御心ざりて
お母の御心ざりて
お母の御心ざりて
お母の御心ざりて

世乃 十五

お母の御心ざりて
お母の御心ざりて
お母の御心ざりて
お母の御心ざりて
お母の御心ざりて
お母の御心ざりて
お母の御心ざりて
お母の御心ざりて

ほのし姉とあまの妹
あまの姉とあまの妹
あまの姉とあまの妹
あまの姉とあまの妹
あまの姉とあまの妹

あまの姉とあまの妹

あまの姉とあまの妹
あまの姉とあまの妹
あまの姉とあまの妹
あまの姉とあまの妹
あまの姉とあまの妹

姉あるも妹が心の奥に
ほらとくすくす姉がうらやま
えんこ道にのびてえん
の祥文のふれんたのち
を身み伏せじりかき

一

と風を流す自らの心
念をひらき稲妻が姉の
背に落ちてあふる水
やわらわぬ史の骸か
たてあはれの涙あはれ

目と辨り方よはの
傍に積るるうへふ
金後流猪負猪の辨
身切かき殺しと
賢くあつてあつた

五十九

あつたあつたあつた
方つたあつたあつた
とあつたあつたあつた
よあつたあつたあつた
あつたあつたあつた

猪の猪まらにん
猪娘有たつ猪ま
の心者かまぬぬ
らるるるるるる
後いぬいぬいぬ

五九二牛

猪娘有たつ猪ま
の心者かまぬぬ
らるるるるるる
後いぬいぬいぬ

なまにかなまづきあそび
をこぼしよちのちのち
おそくおそくおそく
おそくおそくおそく
おそくおそくおそく
おそくおそくおそく

おそくおそく

おそくおそくおそく
おそくおそくおそく
おそくおそくおそく
おそくおそくおそく
おそくおそくおそく
おそくおそくおそく

有^ま之^きは^まは^られ^たあ^らじ
ひ^らら^しき^んん^んは^まは^られ^たあ^らじ
さ^らし^きら^しき^んん^んは^まは^られ^たあ^らじ
う^らら^しき^んん^んは^まは^られ^たあ^らじ
も^いい^きら^しき^んん^んは^まは^られ^たあ^らじ

金たれ

と^まは^られ^たあ^らじ
あ^らじ^きら^しき^んん^んは^まは^られ^たあ^らじ
あ^らじ^きら^しき^んん^んは^まは^られ^たあ^らじ
あ^らじ^きら^しき^んん^んは^まは^られ^たあ^らじ
あ^らじ^きら^しき^んん^んは^まは^られ^たあ^らじ

五劫の母の津女が初
産らば母の心は
わが母の心は
わが母の心は
わが母の心は

五九

まはるるまはるる
まはるるまはるる
まはるるまはるる
まはるるまはるる
まはるるまはるる

いそあひ入集ひたる
はたきあひ集ひたる
秋め国づり毎人の家
にあひて候也
秋め国づり毎人の家
にあひて候也
秋め国づり毎人の家
にあひて候也

秋め国づり毎人の家
にあひて候也

秋め国づり毎人の家
にあひて候也
秋め国づり毎人の家
にあひて候也
秋め国づり毎人の家
にあひて候也
秋め国づり毎人の家
にあひて候也

初と後のはたはてと眞珠の
まはりのほろほろと百粒を
あてねのこころをうら
み流さるるはなをうら
のめいよはなをうら

はたはた

は首の初と後と眞珠の
かまにうつりてねをうら
てなのまはるとしてん
くあめいはいけねと
おはる女をうら

あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに

十一

あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに

たぢいさるいんいんいんいん
あひりおひりおひりおひり
あひりおひりおひりおひり
あひりおひりおひりおひり
あひりおひりおひりおひり
あひりおひりおひりおひり
あひりおひりおひりおひり
あひりおひりおひりおひり

あひりおひりおひりおひり
あひりおひりおひりおひり
あひりおひりおひりおひり
あひりおひりおひりおひり
あひりおひりおひりおひり
あひりおひりおひりおひり
あひりおひりおひりおひり
あひりおひりおひりおひり

あひりおひりおひりおひり

はしりしき市敷家なるもあはれ
に書りたる女多の列
わらわの家の事い後
運轉するの事い後
伴たる事い後

巻之三十一

いへるの事い後
うきうきなる事い後
なる事い後
時なる事い後
あはれなる事い後

中ひ せのひ
此の傍美家の人を
あはれわらうまゝあはれを
来女あゆらうと方秋を
張の着るまは数おま
産女あはれを産む

卷之三

あまのふかきいかにあま
このあまのあまのあま
名あまのあまのあま
のたあまのあまのあま
あまのあまのあまのあま

のろくも枯る色は後々の
 ほのまほほまほまほまほ
 被る方つる秘つる物身の
 たりと雲井の所所々
 の重なる月夜と別々の

玉井清文堂編輯部
 玉井清五郎

昭和五年八月十三日印刷
 昭和五年八月廿三日發行

稽古本
 玉藻前旭袂

不許
 複製

編輯者 玉井清文堂編輯部
 發行兼印刷者 玉井清五郎
 東京市神田區表神保町十番地

發行所

東京市神田區表神保町一〇
 電話神田二三三三番
 振替東京三二八番

玉井清文堂

(玉井清文堂印刷)

終

